

# イタリア簿記の原型(Ⅱ)

— Pacioli, Luca 1494年 —

土 方 久

本稿は「イタリア簿記の原型」と題する論文の後段である。前段は本誌（『商学論集』（西南学院大学），51巻2号）に公表したところである。複式簿記としては、どこがイタリア簿記であるかについて、さらに、1494年にPacioloによって出版された印刷本『算術・幾何・比および比例全書』の第Ⅰ部、第9編の第11論説「計算と記録の詳説」を解明して、筆者なりの卑見を披瀝することにした。

## 2. 帳簿締切

さらに、帳簿締切についてである。帳簿締切までに、実際に勘定が締切られるのは、まずは、(1) 商品が完売されて、X商品、Y商品に区別する商品勘定が締切られる場合である。さらに、(2) 勘定の余白がなくなって、新しい勘定に振替えられる場合である。帳簿締切として、実際に帳簿が締切られるのは、最後に、(3) 帳簿全体が更新されて、帳簿の更新時に、新しい帳簿に振替えられて、翌期に繰越される場合である。

まずは、(1) 商品が完売されて、X商品、Y商品に区別する商品勘定は「口別損益」である商品売買益または商品売買損を計算して締切られる。商品売買益または商品売買損は「損益勘定」(carta del pro e danno) に振替えられる。しかし、振替えられるのが、なぜかについては、Paciolo自身、全く解説してはいない。損益勘定は、「(新しい) 帳簿に繰越さなくてもよい勘定、たとえば、自己にしか関係しない、誰にも知らせる必要のない勘定」<sup>38)</sup> と解説するくらい

38) Pacioli, Luca; *op cit*, Cap. 34 (f. 209L). 二重括弧および括弧内は筆者。

Vgl., Penndorf, Balduin; *a. a. O.*, S. 144/145/146.

参照, 片岡義雄著; 前掲書, 246/247/248/249頁。

である。

そこで、想像するに、債務勘定としての「資本主勘定」が開設されるかぎりでは、利益（収益）は資本主が享受する権利、したがって資本主に対しては、最終的に「債務の発生」として、これに対して、損失（費用）は資本主が負担する義務、したがって資本主に対しては、最終的に「債務の消滅」として、直接に資本主勘定に振替えられることも可能ではある。しかし、「資本金」自体は、利息を生み出す「元金」、利益を生み出す「元本」として、企業にとって固有の意味を持つので、「資本金勘定」が開設されるかぎりでは、「損益勘定」は資本金勘定からは独立して開設される。損益勘定に計算される純利益または純損失は、元本に対する「資本の増加」または「資本の減少」として、最終的に資本金勘定に振替えられるまでは、「資本金」自体が企業にとって固有の意味を持つからこそ、商品売買益または商品売買損も、これまた、元本に対する「資本の増加」または「資本の減少」として、まずは、資本金勘定からは独立して開設される「損益勘定」に振替えられるのではなかろうか。

たとえば、「商品売買損」の振替記録について、Pacioloは表現する。「商品売買に損失を被る場合に、元帳のこの勘定には、貸方の面よりも借方の面が大きいので、借方の面と均等にするために、差額を貸方の面に加算する」<sup>39)</sup>。そのために、「利益と損失、地方によっては、利潤と損失、増益と損傷とも呼称される勘定が開設されて、常時、元帳のその勘定を均等にしなければならない」<sup>39)</sup>。それにしても、「仕訳帳には記録されることはない。元帳に見出されるだけで十分である。商品勘定に表示されるのは、実際の取引ではなく、借方の面および貸方の面に発生する余剰 (avanzate) または不足 (mancate) であるからである」<sup>39)</sup> と。

そこで、商品売買損の振替記録について、Pacioloが例示する「元帳」を原文と共に表示することにする。

---

39) Pacioli, Luca; *op cit*, Cap. 27 (f. 207R). 括弧内は筆者。

Cf., Geisbeek, John B.; *Ancient Double-Entry Bookkeeping*, Denber 1914, p. 67.

Vgl., Penndorf, Balduin; *a. a. O.*, S. 135/136.

参照, 片岡義雄著; 前掲書, 217/218頁。括弧内は筆者。

元帳では、仕訳帳から転記されることもなく、商品勘定の右側ないし貸方の面に記録するのは、「商品は貸方（商品は持つべし＝私に貸している）」は冒頭に記録されるので、これを省略して、

「(何月何日) 相手 損益。

商品勘定の差額として発生する損失。これが振替えられる損益勘定の元丁は何丁

(金額は、何Lira 何soldo 何grossi 何picioli)」<sup>39)</sup>。

**p p e dāno q̄l q̄ metto**

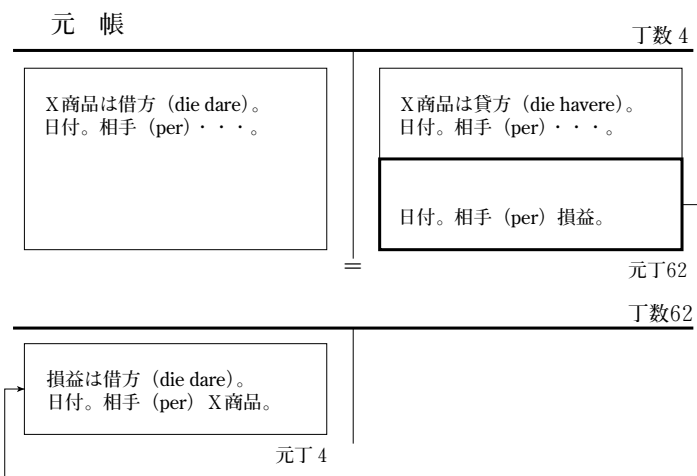
**p saldo de q̄sta p danno sc̄cto zc̄. e segnarai le carti di p e danno nel traz fuoza lapir<sup>a</sup>.**

損益勘定の左側ないし借方の面に記録するのは、  
「損益は借方（損益は支払うべし＝私に借りている）。何月何日。(相手 商品。)商品に発生する損失はいくらで、商品勘定の貸方の面に差額として記録される元丁は何丁

(金額は、何Lira 何soldo 何grossi 何picioli)」<sup>39)</sup>。図11を参照。

**p e dāno oie dare a di zc̄. p laral robba p danno sc̄cto ran**

**ro zc̄. posto i q̄lla al die b̄ere p suo saldo ape acarti zc̄.**



- \*X商品勘定は丁数4と仮定。
- \*損益勘定は丁数62と仮定。

図11

これに対して、「商品売買益」の振替記録についても、Pacioloは表現する。「商品について、貸方の面が借方の面よりも大きいなら、これとは反対に記録する。商品が完売されると、結果は損失であろうと利益であろうと、常時、元帳は締切られた勘定にするために、借方の面と貸方の面を均等になるようにする」<sup>39)</sup>。したがって、「口別損益」である商品売買益または商品売買損を計算して締切られる、X商品、Y商品に区別する商品勘定では、「そうすることによって、利益を得たか、損失を被ったか、いくらであるか、簡単かつ的確に認識しうる。損益勘定は、すべての元帳の最終的な勘定である資本金勘定、したがって、これ以外の勘定の収容所 (receptaculo) である資本金勘定によって締切られねばならない」<sup>39)</sup> と。

さらに、(2) 勘定の余白がなくなると、新しい勘定に振替えられる。Pacioloは表現する。「勘定の借方の面か貸方の面の余白がなくなって、もはや記録しえない場合には、これ以外のすべての勘定の末尾に、新しく直接に振替えられるべきではない。元帳では、繰越された勘定と、これ以外のすべての勘定の間に、

空白がないようにする。このような帳簿では、不正があることになるからである」<sup>40)</sup>。したがって、「繰越されねばならないのは、同様の勘定の借方の面と貸方の面である。仕訳帳に記録されることはない。無駄な徒勞であろうので、仕訳帳に記録される必要はない」<sup>40)</sup>のである。「ヨリ少ないだけの金額を加算しなければならぬ。したがって、勘定の借方の面が貸方の面よりも大きい場合には、その差額だけが貸方の面に加算されるべきである」<sup>40)</sup>と。

たとえば、「債権残高」の振替記録について、Pacioloは表現する。「Martin (債務者)の多くの項目について、彼の勘定は長々と続くので、これが繰越されると仮定する。元帳では、この勘定は丁数30にあるが、すべての元帳の末尾の勘定は丁数60の上の部分であると仮定する。しかも、丁数60には、Martin (債務者)の勘定を記録するだけの余白が、まだあると仮定する。彼に対する債権は80Lira 15soldo 15grossi 24piccoliであって、彼によって、72Lira 9soldo 3grossi 17piccoliが返済されたとする。借方の面から貸方の面を控除すると、したがって、72Lira 9soldo 3grossi 17piccoliを控除すると、8Lira 6soldo 5grossi 7piccoliの差額が残ることになる。この差額は債務者(借主)として新しく繰越される。この金額だけが以前の(余白のなくなった)勘定の貸方の面に加算されねばならない」<sup>40)</sup>と。

そこで、債権残高の振替記録について、Pacioloが例示する「元帳」を原文と共に表示することにする。

元帳では、仕訳帳から転記されることもなく、余白がなくなった債権勘定(丁数30)の右側ないし貸方の面に記録するのは、「Martin (債務者)は貸方(債務者Mは持つべし=私に貸している)」は冒頭に記録されるので、これを省略して、

「何月何日。相手 彼自身。

この元帳の借方の面に差額として新しく繰越。ここに、その残高として記録。

40) Pacioli, Luca; *op cit*, Cap. 28 (f. 207R). 二重括弧および括弧内は筆者。

Vgl., Penndorf, Balduin; *a. a. O.*, S. 136/137.

参照, 片岡義雄著; 前掲書, 220/221/222頁。

債権残高の金額は、8Lira 6soldi 12grossi 7piccoliの誤植。

元丁60

金額は、8 Lira 6 soldo 5 grossi 7 piccoli<sup>40)</sup>。

**avi. zc. p lui medeo ql porto auan**

**ti in qfto aloia dare p resto ql pogo q p saldo. 8 8 f 6 g 5 p 7. val a carri. 60.**

このように記録すると、「この勘定の借方の面および貸方の面は斜線によって抹消されて、元丁60の元帳の借方の面に移行される。すでに注目したように、まだ記録されていないなら、常時、最初に『年号』を記録することによって、この残高は記録される<sup>40)</sup>。したがって、

新しい債権勘定（丁数60）の左側ないし借方の面に記録するのは、  
「Martin（債務者）は借方（債務者Mは支払うべし＝私に借りている）。何月何日。相手 彼自身。

以前に差額として繰越。すでに、この元帳の貸方の面に残高として記録。元丁30金額は、8 Lira 6 soldo 5 grossi 7 piccoli<sup>40)</sup>。図12を参照。

**di Martino die dare a di zc. p lui medemo p resto tratto da ozieto in qfto posto al die**  
**hère p saldo d qlla. val a carri. 30. 8 8 f 6 g 5 p 7.**

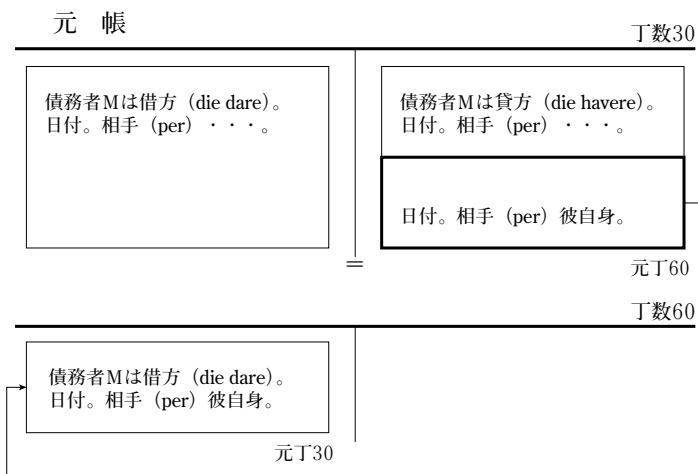


図12

ところが、勘定の余白がなくなって、新しい帳簿に振替えられる場合には、「日付は記録しない」<sup>41)</sup>とか、「これを記録している行の欄外に、残高を意味する『残』の符号を付さなければならない」<sup>41)</sup>

**£ lo detto verso si debe segnare in margine dauanti cofi. cioè 1R°. che significa resto**

とも説明するので、これとは相違して振替えられるようでもある。Pacioloは表現する。「勘定の余白は完全に記録されてしまい、もはや、いかなる項目も記録しえないので、これを繰越そうとする場合には、この勘定の残高が借方の面にあるか、貸方の面にあるかを調査しなさい。たとえば、勘定が貸方の面に 28Lira 4 soldo 2 denariの余剰を表示するとしたら、この勘定の反対の面に、日付は記録しないで、以下のように記録しなければならない。  
(何かは) 借方 (何かは支払うべし=私に借りている)。28Lira 4 soldo 2 denari. 相手 この勘定の残高。元丁は何丁の貸方の面に繰越。

**£ de dare. § 28 f 4 d 2. per resto di q̄sto conto posto haucere in q̄sto a car. e ẽ fatto.**

このようにして解決される。この項目については、これを記録している行の欄外に、残高を意味する『残』の符号を付さなければならない。このようにして解決される。この符号が借方の面にあっても、これを記録している行は、債務者(借主)を意味するのではなく、借方項目を使用することによって、貸方項目が振替えられることを意味する。さらに、新しい帳面が見出されるまで丁数を捲って前に進める。ここにも、日付は記録しないで、同様の勘定を債権者(貸主)として開設、これを表記して、新たな項目を記録する。以下のように記録する。

(何かは) 貸方 (何かは持つべし=私に貸している)。28Lira 4 soldo 2 denari.  
相手 この勘定の残高。元丁は何丁(の借方の面)から繰越。

41) Pacioli, Luca; *op cit*, Cap. 36 (f. 210L). 二重括弧および括弧内は筆者。

Vgl., Penndorf, Balduin; *a. a. O.*, S. 150/151/152.

参照, 片岡義雄著; 前掲書, 266/268/269頁。

**£ dirai cofi tale d' rali de bere. § 18 f 4. d 2. f 6  
no per refto duno fuo conto fuaro in qfto a ca.**

この項目についても、これを記録している行の欄外に、残高を意味する『残』の符号を付さなければならない。このようにして解決される。勘定が貸方の面に残高を表示した場合のように、勘定が借方の残高を表示したとしても、同様に、残高を貸方の面に記録してから、この貸方の面に記録したものを借方の面に記録する<sup>41)</sup>と。図13を参照。

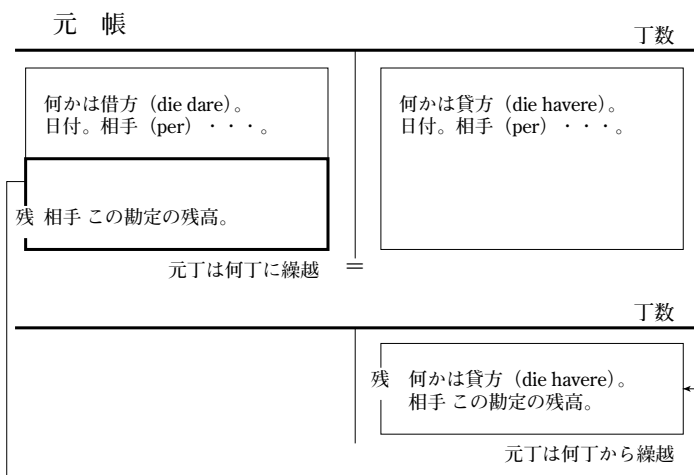


図13

最後に、(3) 帳簿全体が更新されて、帳簿の更新時に、新しい帳簿に更新されて、翌期に繰越される。「十字架を付される帳簿」から「Aの標識を付される帳簿」、さらに、「Bの標識を付される帳簿」に繰越されるのである。Pacioloは表現する。「取引が進捗することによって、取引がすべて記録されてしまうか、ある一定の時間が経過してしまい、そのために、別の帳簿に取替えようとする場合に、または、帳簿の余白がなくなってしまう、これから区別しなければならない場合には、この帳簿と、これ以外の帳簿には、まずは、表紙に標識



を付さなければならない。しかし、取引のすべてが記録されてしまわなくても、時折、地方によっては、これを各年に締切るような慣習もある」<sup>41)</sup>のである。「時々自己の取引を速やかに見出すためには、2番目の帳簿に、しかるべく整理して、最初の1番目の帳簿から区別する標識を付さなければならない。年号も必要である。まずは、帳簿に栄光に満ちた標識を付すのが真正のキリスト教徒の間では好ましい慣習である。この標識を眼前にすると、邪悪な敵は退散して、悪魔の群れは、まさに戦慄する。したがって、神聖な十字架の標識、幼い頃にアルファベットを習い始めた、あの神聖な十字架を付すことによってである。そこで、2番目の帳簿には、Aの標識、それから、3番目の帳簿には、Bの標識を付すように、アルファベットの順に従い、標識を付すのである。まずは、十字架の標識を付される帳簿、したがって、十字架の標識を付される日記帳、十字架の標識を付される仕訳帳、十字架の標識を付される元帳ならびに十字架の標識を付されるアルファベット索引帳と呼称される。さらに、2番目の帳簿は、Aの標識を付される日記帳、Aの標識を付される仕訳帳、Aの標識を付される元帳などと呼称される」<sup>41)</sup>と。

しかし、Paciolo自身、「地方によっては、これを各年に締切るような慣習もある」とは表現するにしても、さらに、ヨリ明確に、「帳簿が完全に記録されるか、新しい年度が開始されるために、帳簿を更新しようとする場合、ある帳簿から別の帳簿に、どのように繰越されるか説明されねばならない。新しい年度が開始されるために、ある帳簿から別の帳簿に繰越されるのは、大商人が毎年、特に年始に注目するところ。著名な地方の慣習である」<sup>42)</sup>とは表現するにしても、あくまで「口別損益計算」(Erfolgsrechnung an die Partien)の域に留まる。「期間損益計算」(Periodenerfolgsrechnung)に移行するとなると、商品が売売されないなら、帳簿棚卸であっても、「期末棚卸」が導入されねばならない。十字架の標識を付される帳簿、X商品、Y商品に区別する商品勘定の貸方の面に、「売残商品」である繰越商品の商品残高を追加、記録すること

42) Pacioli, Luca; *op cit*, Cap. 32 (f. 208L).

Vgl., Penndorf, Balduin; *a. a. O.*, S. 140/141.

参照、片岡義雄著；前掲書、233/234/235頁。

によって、「期間の口別損益」である商品売買益または商品売買損を計算して締切られねばならない。しかし、期末棚卸が導入されてはいないのである。そのように計算して締切られてもいないのである。

本来、帳簿全体が更新されるのは、帳簿全体が一杯になってしまい、Paciolo自身、表現するように、十字架の標識を付される帳簿から新しい帳簿、まずは、Aの標識を付される帳簿、さらに、Bの標識を付される帳簿に振替えられる場合である。口別損益計算の域に留まるかぎりでは、十字架の標識を付される帳簿、X商品、Y商品に区別する商品勘定の借方の面に記録される「商品の仕入」、貸方の面に記録される「商品の売上」は、商品が完売されないなら、Aの標識を付される帳簿、X商品、Y商品に区別する商品勘定に振替えられて、借方の面には「商品の仕入」、貸方の面には「商品の売上」が、そのまま振替えられるのではなかろうか。

もちろん、翌期に商品売買益または商品売買損の「口別損益」を計算するにしても、どれだけ仕入れたか、どれだけ売上げたかまで認識しようとするなら、このように振替えられるしかない。しかし、翌期に商品売買益または商品売買損の「口別損益」を計算するだけであるなら、商品勘定の借方の面と貸方の面の差額が振替えられるだけでかまわないのかもしれない。

ところで、帳簿締切については、Pacioloは表現する。「すべての元帳を勘定ごとに以下のように締切ようにする。まずは、現金、債権、商品、得意先(債務)から開始して、Aの標識を付される帳簿、すなわち、新しい元帳に繰越される」<sup>43)</sup>。これまた、「残高を仕訳帳に記録する必要はない」<sup>43)</sup>のである。「すべての勘定の借方、貸方を合計して、常時、その差額を金額の少ない面に加算する」<sup>43)</sup>のである。したがって、「ある元帳から別の元帳に繰越されることは、残高が、同一の標識を付される元帳で、ある帳簿から別の帳簿に振替えられるのと全く同様で、この間の相違はない。同一の標識を付される元帳の紙面に振替えられるのに対して、次の標識を付される元帳の紙面に繰越されるだけ

43) Pacioli, Luca; *op cit*, Cap. 34 (f. 208R). 二重括弧および括弧内は筆者。

Vgl., Penndorf, Balduin; *a. a. O.*, S. 143/144.

参照、片岡義雄著；前掲書，244/245頁。

である。ある帳簿から別の帳簿に繰越される場合には、記録するのが、それぞれの元帳において1回かぎりではない。それぞれの元帳の最後の項目は、常時、このような特色を持っている」<sup>43)</sup>と。

たとえば、「債権残高」の振替記録、翌期に繰越されるので、繰越記録について、Pacioloは表現する。「十字架の標識を付される元帳、丁数60には、債務者Martinの残高は12Lira 15soldo 10grossi 26picioliであって、これがAの標識を付される元帳、丁数8の借方の面に繰越されると仮定する。この場合に、十字架の標識を付される元帳には、貸方の面に加算しなければならない」<sup>43)</sup>と。

そこで、「債権残高」の繰越記録について、Pacioloが例示する「元帳」を原文と共に表示することにする。

元帳では、仕訳帳から転記されることもなく、十字架の標識を付される帳簿、債権勘定(丁数60)の右側ないし貸方の面に記録するのは、「Martin(債務者)は貸方(債務者Mは持つべし=私に貸している)」は冒頭に記録されるので、これを省略して、

「何月何日。常時、元帳が均衡される日付と同一の日付を記録するのだが。相手 彼自身。

ここに、この勘定の残高として記録する差額について、Aの標識を付される元帳、借方の面に繰越。元丁8

金額は、12Lira 15soldo 10grossi 26picioli」<sup>43)</sup>。

**£ a di 26. ponẽdo sempre el medesimo di. che fai el bilancio. p lui medemo porto in quader no. A. al die dare per reffo qual d pōgo per saldo de questa val acarri. 8. 8 12. 15. 10. 26**

このように記録すると、「この勘定の合計がこの勘定の借方の面、貸方の面の下の部分の余白に記録されることによって、この勘定の借方の面、貸方の面は斜線によって抹消される。両面を同額にするのである。そうすることによって、即座に間違いがないことが判明する。振替えられる場合には、この残高が繰越される、Aの標識を付される元帳の丁数が記録される。それから、Aの標識を付される元帳の借方には、まずは、帳面の上の段に『年号』、勘定には『日付』が記録される」<sup>43)</sup>。それから、

Aの標識を付される帳簿、新しい債権勘定（丁数8）の右側ないし貸方の面に記録するのは、

「Martin（債務者）は借方（債務者Mは支払うべし＝私に借りている）。何月何日。相手 彼自身。

十字架の標識を付される元帳から繰越される差額として、この残高を貸方の面に記録。元丁60

金額は、12Lira 15soldo 10grossi 26piccoli」<sup>44)</sup>。図14を参照。

**Martin della tale 7c. die dare a di. 70p  
 lui medemo p resto tratto del libro croci. posto al die ballere per saldo de qlla. val a car. 60.  
 § 12. f. 15. g. 10. p. 26.**

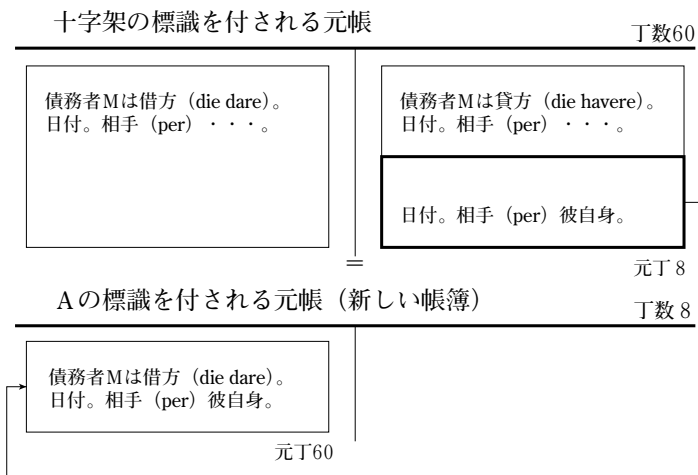


図14

したがって、債務者A、Bに区別する債権、債権者C、Dに区別する債務が記録される人名勘定は、債権残高、債務残高を計算して締切られる。現金の出納

44) Pacioli, Luca; *op cit*, Cap. 34 (f. 208R/209L). 括弧内は筆者。

Vgl., Penndorf, Balduin; *a. a. O.*, S. 144.

参照, 片岡義雄著; 前掲書, 245/246頁。

はもちろん、X商品、Y商品に区別する商品の売買を記録する物財勘定も同様。現金勘定は、現金残高を計算して締切られる。商品勘定については、既述。いずれの勘定も新しい勘定に直接に振替えられる。したがって、新しい帳簿に振替えられて、翌期に繰越されるのである。

もちろん、利益(収益)の発生と損失(費用)の発生が記録される名目勘定も、利益(収益)残高または損失(費用)残高を計算して締切られる。利益(収益)残高は、元本に対する「資本の増加」ではある。損失(費用)残高は、元本に対する「資本の減少」ではある。しかし、「資本金」自体が、利息を生み出す元金、利益を生み出す元本として、企業にとって固有の意味を持つので、まずは、資本金勘定から独立して開設される「損益勘定」に振替えられる。損益勘定に計算される純利益または純損失は、元本に対する「資本の増加」または「資本の減少」として、最終的に資本金勘定に振替えられる。したがって、資本金勘定は資本金残高を計算して締切られる。資本金残高も新しい勘定に直接に振替えられる。したがって、新しい帳簿に振替えられて、翌期に繰越されるのである。

そこで、「利益(収益)残高」または「損失(費用)残高」の振替記録について、Pacioloは表現する。「Aの標識を付される帳簿には繰越さなくてもよい勘定、たとえば、自己にしか関係しない、誰にも知らせる必要のない勘定は、諸掛り経費、家事費、取得と出費、すべての臨時費、借地料、家賃、使用料、小作料などである。この勘定は、十字架の標識を付される元帳であって、利益と損失、増益と損傷、場合によっては、利潤と損失とも呼称される勘定に、借方の面はこの勘定の借方の面に振替えられて締切られる」<sup>38)</sup>。したがって、「残高については」、「常時、借方の面か貸方の面、いずれか少ない金額の面に加算しなければならない。たとえば、

(何月何日。) 相手 損益。元丁は何丁

(金額は、何Lira 何soldo 何grossi 何piccioli)」<sup>38)</sup>と。

**p. p. c. v. a. n. o. i. q̄iſto a. c. a. r. r. i. t. a. t. e. z. é.**

したがって、損益勘定に振替えられるのは、まずは、商品が完売されて、X

商品、Y商品に区別する商品勘定に計算される商品売買益または商品売買損の「口別損益」である。完売されないかぎりでは、損益勘定に振替えられることはない。したがって、損益勘定に計算されるのは、「口別損益の合計」ではある。しかし、損益勘定には、さらに、諸掛り経費、家事費、営業費などの損失(費用)残高または利益(収益)残高も振替えられる。したがって、損益勘定に計算されるのは、「口別損益の合計」だけでもない。帳簿の更新時まで振替えられて計算されただけの「純利益」または「純損失」でしかない。

さらに、「純利益または純損失」の振替記録について、Pacioloは表現する。「損益勘定によって締切られた後には、借方の面、貸方の面を合計することによって、(純)利益、(純)損失が直ちに認識されうる。借方の面と貸方の面を均衡することによって、すべてが均等になるからである。減算されるべきものは減算、加算されるべきものは加算して、均等になるように、しかるべき箇所ですべて、そのようにされるからである。損益勘定の借方の面が貸方の面よりも大きいなら、企業の開始以来、それだけ(純)損失を被っている。しかし、貸方の面のほうが大きいなら、この期間の間に、それだけ(純)利益を得ている」<sup>38)</sup>。したがって、「この勘定によって、(純)利益および(純)損失が判明したところで、企業の開始時に、自己のすべての財産が記録された財産目録、これが記録されたところの『資本金勘定』によって締切られる」<sup>38)</sup>。たとえば、「損失(費用)が利益(収益)よりも大きい場合には、最初に記録するのは、『神よ、実際に善良なるキリスト教徒たるすべての者を護らせ賜え』。通常の方法によって、貸方の面に加算される」<sup>38)</sup>と。

そこで、純損失の振替記録について、Pacioloが例示する「元帳」を原文と共に表示することにする。

元帳では、仕訳帳から転記されることもなく、十字架の標識を付される帳簿、損益勘定の右側ないし貸方の面に記録するのは、「損益は貸方(損益は持つべし=私に貸している)」は冒頭に記録されるので、これを省略して、「何月何日。相手 資本金。ここに発生した損失のために。元丁は何丁。金額はいくら(何Lira 何soldo 何grossi 何piccoli)」<sup>38)</sup>。

**a di zc.p caudal i q̄stos vanno sc̄to a carti zc.val zc.**

このように記録すると、「損益勘定は、借方の面と貸方の面が斜線によって抹消されて、借方の面と貸方の面、下の部分の余白には、合計が記録される。両者は一致しなければならない」<sup>38)</sup>。それから、

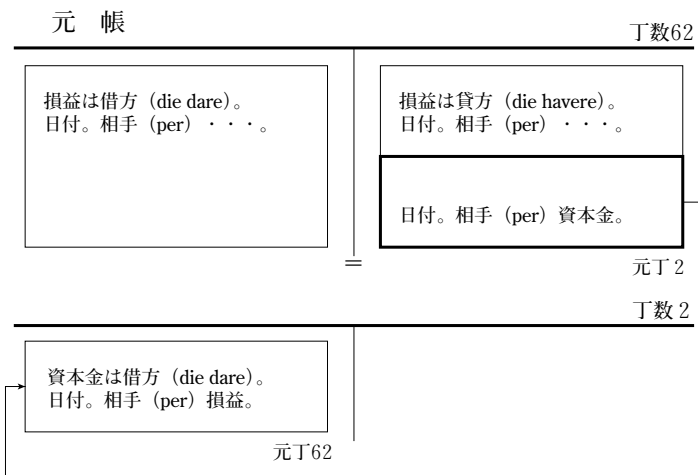
十字架の標識を付される帳簿、資本金勘定の左側ないし借方の面に記録するのは、

「資本金は借方（資本金は支払うべし＝私に借りている）。何月何日。相手 損益。

発生した損失のために。損益勘定の貸方の面には、残高として記録済。元丁は何丁。

金額は、何Lira 何soldo 何grossi 何piccioli」<sup>38)</sup>。図15を参照。

**È poi ala p[er]ta del caudale i dare dirai caudale die dar  
a di zc. p. p e v[er]anno p[er] v[er]anno lecto posto in quella al die bauere p[er] saldo fuo val a carti zc.  
s. f. g. p. zc.**



- \* 損益勘定は丁数62と仮定。
- \* 資本金勘定は丁数 2 と仮定。

図15

これに対して、「純利益」の振替記録についても、Pacioloは表現する。「(純)

利益が発生する場合には、したがって、損益勘定の貸方の面が借方の面よりも大きい場合には、均等になるように、借方の面には、それだけ加算されて、資本金勘定の丁数が記録される。資本金勘定には、貸方の面に記録される」<sup>38)</sup>。もちろん、「企業の開始時に、自己のすべての財産が記録された財産目録、これが記録されたところの『資本金勘定』によって締切られる」からには、「元帳のすべての勘定の、常時、最終的な勘定であらねばならない、この資本金勘定に、Aの標識を付される元帳に記録される借方の面と貸方の面の金額を加算するなら、新たな自己のすべての財産が認識されるであろう」<sup>38)</sup>。したがって、「この勘定は、商人の事業にとっては、常時、自己の資本金を認識して、最後の締切時に、営業が利益を生み出しているかどうかを認識するために、最高に必要なである」<sup>27)</sup>と。

ところで、帳簿締切については、Pacioloが、帳簿の更新前に、まずは、(1)「帳簿の突合」(scontro)、さらに、(2)締切前検証表としての「元帳の均衡表」、これに対して、帳簿の更新後には、(3)締切後検証表としての「合計の総計表」(summa summarum)を解説することにも注目しなければならない。

まずは、(1)帳簿締切に移行するには、帳簿記録に過誤のないことが検証しておかれねばならない。仕訳帳の左端の行に記録される、転記される元帳の丁数、「元丁」が記録されるので、仕訳帳から元帳が照合されねばならない。さらに、元帳の摘要欄の片隅、右端に、その相手勘定の丁数、「元丁」が記録されるので、元帳に記録される勘定から相手勘定が照合されねばならない。

そこで、帳簿の突合について、Pacioloは表現する。「1人では困難であろうので、まずは、1人の助手を連れてくる。自己が元帳を持つものに対して、ヨリ確実なものにするためには、この助手に仕訳帳を持たせなさい。彼は仕訳帳の最初の項目から開始して、借方の面から貸方の面の順序に従い、この項目の記録される、自己の持つ元帳の両面を読み上げるように命じなさい。助手が読み上げるのを聞きながら、常時、助手が読み上げる項目を捜し出すようにする。記録されたのが、何のためか、誰のためか、金額はいくらか、この助手は伝えるであろう。自己は、助手が伝える箇所が同じ内容であるか、同じ人、同じ金



額であるかを検査するようにする。元帳に記録されたものが仕訳帳のそれと一致するのが判明するなら、照合済みの符号を付すのである。金額の上か、どこかに、惑わすことのない符点か、何らかの符号を付すようにする<sup>42)</sup>。もちろん、「注意するのは、いかなる項目にも、助手がしないのに自己が、自己がしないのに助手が、符点を付したり、照合済の印を付したりはしないことである。そうすることによっては、大きな間違いが発生しうからである<sup>42)</sup>。したがって、「すべての元帳と仕訳帳が順序よく突合されて、元帳の借方の面と貸方の面が仕訳帳のそれと完全に一致するのが見出されるなら、項目は正確にうまく記録されている<sup>42)</sup>。もちろん、「日記帳に記録しているなら、日々、仕訳帳と日記帳ないし控え帳を突合せの場合も同様である<sup>45)</sup>。しかし、「最後に突合されねばならないのは元帳である。仕訳帳はその前に突合されねばならない<sup>45)</sup>と。

ところが、商品が完売されて、X商品、Y商品に区別する商品勘定が締切られる場合にも、さらに、勘定の余白がなくなって、新しい勘定に振替えられる場合にも、仕訳帳に記録されることはない。最後に、帳簿全体が更新されて、帳簿の更新時に、新しい帳簿に更新されて、翌期に繰越される場合にも同様。仕訳帳に記録されることはない。

そこで、帳簿の突合について、さらに、Pacioloは表現する。「注意するのは、元帳に、仕訳帳に記録されなかったために、時々、仕訳帳の反対項目とは突合されなかった多くの項目があることである。勘定から繰越される場合に、借方の面か貸方の面に記録される残高が、それである<sup>45)</sup>。そのために、「このような残高については、この項目に付される丁数を拠り所にするので、元帳は借方の面と貸方の面に、その反対項目が見出される。この反対項目が適切な箇所に見出されるなら、元帳は間違いになる<sup>45)</sup>。したがって、「元帳は借方の面だけで、(相手勘定として記録される)貸方の面の丁数が即座に見出されるので、項目と項目とを突合せう<sup>45)</sup>のである。

さらに、(2) 帳簿締切に移行しうかどうか、したがって、帳簿記録に過誤

45) Pacioli, Luca; *op cit*, Cap. 32 (f. 208R). 括弧内は筆者。

Vgl., Penndorf, Balduin; *a. a. O.*, S. 142.

参照, 片岡義雄著; 前掲書, 236/237頁。

のないことを改めて検証するために、締切前検証表としての「元帳の均衡表」が作成されねばならない。しかし、「元帳の均衡表」については、Pacioloは三様に意識しているようである。したがって、Pacioloの意識している三様の「元帳の均衡表」から整理しておかねばなるまい。

まずは、「元帳の均衡表」として、Pacioloが以下のように表現したことを想起してもらいたい。「この現金は、常時、債務者（借主）として記録されねばならない。商人の企業にあっては、現金が債権者（貸主）になりうることは決してない。ただ債務者（借主）となりうるか、決済されうるかである。したがって、『元帳の均衡表』に債権者（貸主）として出現するとしたら、元帳に間違いがあることを意味する」<sup>17)</sup>と。

このように表現するかぎりでは、勘定の余白がなくなって、新しい勘定に振替えられて締切られた勘定か、帳簿全体が更新されて、帳簿の更新時に、新しい帳簿に更新されて締切られた帳簿、したがって、そのような「現金勘定」自体と解釈されるのではなからうか。Paciolo自身、「現金勘定は、常時、債務者（借主）であるか、借方の面、貸方の面が全く等しいかである。そうでないなら、帳簿には間違いがある」<sup>41)</sup>とも表現することから、その裏付けを得る。

さらに、「元帳から作成される均衡表」として、Pacioloが以下のように表現したことも想起してもらいたい。「項目ごとに、債務者（借主）と債権者（貸主）について記録しなければならない。左側の面に債務者（借主）、右側の面には債権者（貸主）を記録するのである」<sup>20)</sup>。したがって、「そうすることによって、締切時には、『元帳から作成される均衡表』が発生する。借方の面と貸方の面は等しくあらねばならない。借方の面のすべての項目は、どれくらいあろうとも、1枚の紙片に合計して、また同様に、貸方の面のすべての項目も合計すると、双方の面の合計は均衡しなければならない。均衡しないなら、元帳には間違いがあることになる」<sup>20)</sup>と。

このように表現するかぎりでは、「1枚の紙片」、したがって、元帳に組込まれるのではなく、計算書に仮設されるだけの「合計検証表」、今日の「合計試算表」と解釈されるのではなからうか。しかも、帳簿の更新前ではなく、随時に作成されるのではなからうか。貸借平均原理が保証されるかどうかを検証す

るだけであるからである。Paciolo自身、「元帳の均衡表については、真ん中で縦に折られる1枚の紙片の両面、右側の面に、帳簿に記録される債務者（借主）、左側の面に、帳簿に記録される債権者（貸主）が記録される。借方の面の合計が貸方の面の合計と同額であることが判明すると、元帳には間違いがない」<sup>41)</sup>とも表現することから、その裏付けを得る。

しかし、「古くなった元帳の均衡表」(bilancio del libro vecchio)」として、Pacioloが以下のように表現することにも注目してもらいたい。「帳簿の全部が記録されてしまったか、帳簿が古くなってしまい、別の新しい帳簿に繰越そうとする場合に、以下のように記録する。まずは、この古くなった帳簿の表紙に、たとえば、Aの標識が付されるかどうかを調査しなさい。繰越そうとする新しい帳簿の表紙にBの標識を付しなさい。商人の帳簿は、正規にはA、B、Cの順序に記録されるからである。それから、帳簿は正確であるか、貸借は均衡するか、『古くなった元帳の均衡表』を作成しなければならない。それから、この均衡表に記録される順序に従い (per ordine come elli stanno i sul bilancio), 新しい帳簿にすべての債務者（借主）および債権者（貸主）を書き移す」<sup>41)</sup>と。

このように表現するかぎりでは、これまた、「1枚の紙片」、したがって、元帳に組込まれるのではなく、計算書に仮設されるだけの「残高検証表」、今日の「残高試算表」と解釈されるのではなかろうか。もはや、随時にではなく、帳簿の更新前にこそ作成されねばならないのではなかろうか。「古くなった元帳の均衡表」としても、合計検証表は作成しうるにしても、Paciolo自身、表現するように、帳簿の更新前に、「この均衡表に記録される順序に従い、新しい帳簿にすべての債務者（借主）および債権者（貸主）を書き移す」のは、まさに「残高」であらねばならない。合計検証表からは、翌期に繰越される「残高」が判明されるはずもないことから、その裏付けを得る。

したがって、帳簿記録に過誤のないことを改めて検証するために、締切前検証表としては、随時に、「合計検証表」が作成されるのではなかろうか。帳簿の更新前には、「残高検証表」が作成されるのではなかろうか。想像するに、貸借平均原理が保証されるように、間違いなく記録されていることを検証するのが合計検証表と解釈されるからである。間違いなく記録されていることはも

もちろん、貸借平均原理が保証されるように、更新される帳簿から繰越、間違いなく締切られうることを検証するのが残高検証表と解釈されるからである。まさに「締切前検証表」である。

これに対して、(3) 帳簿締切が完了すると、帳簿締切にも過誤のないことが検証しておかれねばならない。締切後検証表としては、これまた、「1枚の紙片」、したがって、元帳に組込まれるのではなく、計算書に仮設されるだけの「合計の総計表」が作成されねばならないのである。

そこで、合計の総計表について、Pacioloは表現する。「(元帳に記録された)残高を確実なものにするために、これ以外に突合せる。1枚の紙片に、十字架の標識を付される元帳の借方の面を合計して、その左側の面に記録する。それから、貸方の面を合計して、その右側の面に記録する。この最終的な合計を再び加算して、借方の面のすべての合計から、『合計の総計表』と呼称される総計、貸方の面のすべての合計からは、これまた、『合計の総計表』と呼称される総計を計算する。しかし、前者は借方の面の総計、後者は貸方の面の総計である。両者の面の総計が等しいなら、したがって、借方の面の総計と貸方の面の総計が同額であるなら、自己の元帳は適切に作成して、保持、締切られていることになる<sup>38)</sup>。しかし、「この総計のどちらかが大きいなら、元帳には間違いがあることになる。神が与え賜う綿密と精励、自己が習得している計算技術によって、この間違いは発見しなければならない」<sup>38)</sup>と。

もちろん、帳簿締切にも過誤のないことが検証されるのは、帳簿の更新後である。したがって、帳簿の更新前に作成される「合計検証表」であろうはずもない<sup>46)</sup>。まして、「残高検証表」であろうはずもない<sup>46)</sup>。想像するに、更新されて締切られる帳簿に、残高が計算される場合には、この残高が繰越されて締切られた帳簿の借方の面の合計の総計と貸方の面の合計の総計が計算されるのが「合計の総計表」ではなかろうか。貸借平均原理が保証されるように、更新される帳簿から繰越、間違いなく締切られたことを検証するのが合計の総計表と解釈されるからである。まさに「締切後検証表」である。

46) 参照、泉谷勝美稿；「パチョーリ「簿記論」の構造」、『経営経済』(大阪経済大学)、6号、1969年3月、192/193頁。

しかし、それだけでもない。これを具体的に例示する Manzoni, Domenicoによって作成される「合計の総計表」(Summe de tutte le partide poste in Quaderno, si in dar come ancho in havere)には、商品が完売されて、X商品、Y商品に区別する商品勘定に、商品売買益または商品売買損が計算される場合に、損益勘定に振替えられて締切られた商品勘定の借方の面の合計と貸方の面の合計、さらに、勘定の余白がなくなって、新しい勘定に振替えられて締切られる勘定に、残高が計算される場合には、この残高が振替えられて締切られた勘定の借方の面の合計と貸方の面の合計も記録されて、振替えられて締切られた帳簿の借方の面の合計の総計と貸方の面の合計の総計も計算されるのである<sup>47)</sup>。この合計の総計表の末尾には、Manzoniは表現する。「元帳は非常に注意深く締切られて、残高が計算されるが、一目瞭然、項目があまりに多くて、あまりに多くの金額が連続するので、記録に間違いがあるかもしれない。しかし、心配は無用。記録する者が有能であるなら、項目の末尾、最後に、そうなるように、項目の両面の合計は間違いのないのだから。元帳の見開きの両面、借方合計の総計と貸方合計の総計が一致しないなら、元帳には間違いがある」<sup>48)</sup>と。

なお、Manzoniの例示する「合計の総計表」の丁数46の右側の面(4頁)を原文と共に表示することにする<sup>48)</sup>。図16を参照。

47) 参照、泉谷勝美稿；「試算表の起源」、『大阪経済大学』、69号、1969年5月、165頁以降。

48) Manzoni, Domenico; *QVADERNO DOPPIO*…; Venezia 1540, f. 46R (QVADERNO).  
なお、「元帳」に打たれた丁数を使用して、46Blattの右側の面Rechtと表現する。  
ここに、丁数45の左側の面は1頁、右側の面は2頁、丁数46の左側の面は3頁、右側の面は4頁。

ところが、Manzoniが例示する「合計の総計表」について、Yamey, Basil S.は表現する。「Pacioloの『合計の総計表』の構造について、その本質は、Pacioloの説明では理解し難い。Manzoniは、自身が理解したところに従い、そして、思い違いをした」と。

Yamey, Basil S.; *Historic Accounting Literature: a companion guide*, Edit. by Yamey, Basil S. & Bywater, Michel F., London/Tokyo 1982, p.44.

しかし、今日のように、「合計線」も「締切線」も引かれことはなく、複数の項目が転記される借方の面、貸方の面だけに、「合計」の金額が記録されて、勘定が締切られることを想像するに、まして、帳簿の1丁に多数の勘定が記録されて、順次、この多数の勘定が締切られることも想像するなら、帳簿締切にも過誤があるとういうものである。したがって、Manzoniの例示するように、「合計の総計表」が作成されることによって、間違いなく締切られたことが検証されるのではなからうか。

## 合計の総計表

丁数46 (右側の面)

元帳の借方の面と貸方の面の項目ごとの合計の総計

元丁	借方の面		貸方の面	
37 ベッチアのSant' Venturin	L15.	s 6. g 8.	L15.	s 6. g 8.
38 現金	L1113.	s 3. g 6. p 8.	L1113.	s 3. g 6. p 8.
38 羅紗	L30.		L30.	
39 家屋	L64.	s10.	L64.	s10.
39 Sant' Jacomo Pelestrina	L64.	s10.	L64.	s10.
39 損益	L138.	s 4. g 5. p 5.	L138.	s 4. g 5. p 5.
40 Cuori Buuini Descnci	L21.		L21.	
40 Sant' Bartholamio Saluin	L13.	s 4.	L13.	s 4.
40 給料	L 4.	s17.	L 4.	s17.
40 Ai Zenti lauoradi de piu sorte	L 9.	s13. g 6.	L 9.	s13. g 6.
40 山の造幣廠の利益	L11.	s10.	L11.	s10.
41 ノーボ山の事務所	L67.	s 1. g 3.	L67.	s 1. g 3.
41 ノビッシイモ山の事務所	L50.		L50.	
41 造幣廠、職員は8人の事務所	L100.		L100.	
41 造幣廠、家賃は7g.10p.の事務所	L53.	s14. g 2.	L53.	s14. g 2.
42 造幣廠、家賃は14p.の事務所	L50.		L50.	
42 聖ロレンツォの家屋	L150.		L150.	
42 フオッサルタはトレブイッサナの土地	L160.		L160.	
42 パラドゥアナの土地	L306.	s10. g10.	L306.	s10. g10.
42 マゼナールの水車小屋	L200.		L200.	
42 スウシディオ山の事務所	L25.		L25.	
43 モイアンの土地	L135.		L135.	
43 家財	L127.	s19. g 8.	L127.	s19. g 8.
43 高級の布地	L101.	s 7.	L101.	s 7.
43 Sant' Jacomo Pavanello	L 4.	s10.	L 4.	s10.
43 給料	L 2.		L 2.	
43 現金	L1108.	s10. g11. p15.	L1108.	s10. g11. p15.
44 損益	L197.	s 2. p29.	L197.	s 2. p29.
44 アルブイッセ・バラレツの資本金	L2366.	s18. g 5. p 5.	L2366.	s18. g 5. p 5.
4頁 合計の総計	L6691.	s13. g 6. p 8.	L6691.	s13. g 6. p 8.
1頁 合計の総計	L5488.	s15. g 9. p29.	L5488.	s15. g 9. p29.
2頁 合計の総計	L2194.	s16. g 8. p29.	L2194.	s16. g 8. p29.
3頁 合計の総計	L9224.	s10. g 4. p20.	L9224.	s10. g 4. p20.
合計の総計の集計	L23599.	s16. g 5. p22.	L23599.	s16. g 5. p22.

Summe de tutte le partite posse in Quzerno, si in dar, come ancho in bauere. 46

37	℞ Veturin dalla uec. in dar	℥ 15	℞ 6	8	8	in hauer	℥ 15	℞ 6	8	8
38	Cassa de contadi	℥ 113	℞ 3	6	8		℥ 113	℞ 3	6	8
38	Panni tenti uesinimi bassi	℥ 30	℞				℥ 30	℞		
39	Seda uesinima	℥ 64	℞ 10				℥ 64	℞ 10		
39	℞ Iacomo pelesrina	℥ 64	℞ 10				℥ 64	℞ 10		
39	Pro & danno	℥ 138	℞ 4	5	5		℥ 13	℞ 4	5	5
40	Cuori buoni descenci	℥ 21	℞				℥ 21	℞		
40	℞ Bortolamio saluin	℥ 13	℞ 4				℥ 13	℞ 4		
40	Spese de salariadi	℥ 4	℞ 17				℥ 4	℞ 17		
40	Ai Xeni laboradi de piu sorte	℥ 9	℞ 13	6			℥ 9	℞ 13	6	
40	Pro di Xeccha in monte	℥ 11	℞ 10				℥ 11	℞ 10		
41	Officio de monte nouo	℥ 67	℞ 1	3			℥ 67	℞ 1	3	
41	Officio de monte nouissimo	℥ 50	℞				℥ 50	℞		
41	Officio della Xeccha, de li 8 per c°	℥ 100	℞				℥ 100	℞		
41	Officio della Xeccha, de 7 d 10 p c°	℥ 53	℞ 14	2			℥ 53	℞ 14	2	
42	Officio della Xeccha, de li 14 p c°	℥ 50	℞				℥ 50	℞		
42	Casa una da statio a san Lorenzo	℥ 150	℞				℥ 150	℞		
42	Possession de trauisana, in Fossalta	℥ 160	℞				℥ 160	℞		
42	Possession di padouana	℥ 306	℞ 10	10			℥ 306	℞ 10	10	
42	Molin da masenar	℥ 200	℞				℥ 200	℞		
42	Officio de monte di sussidio	℥ 25	℞				℥ 25	℞		
43	Possession da moian	℥ 135	℞				℥ 135	℞		
43	Mobili di casa de piu sorte	℥ 127	℞ 19	8			℥ 127	℞ 19	8	
43	Carifce della prima sorte	℥ 101	℞ 7				℥ 101	℞ 7		
43	℞ Iacomo pauanello	℥ 4	℞ 10				℥ 4	℞ 10		
43	Spese de salariadi in monte	℥ 2	℞				℥ 2	℞		
43	Cassa de contadi	℥ 1108	℞ 10	11			℥ 1108	℞ 10	11	
44	Pro & danno	℥ 197	℞ 2				℥ 197	℞ 2		
44	Caunedal de mi Aluisè Vallareffo,	℥ 2366	℞ 18	5			℥ 2366	℞ 18	5	
4	Summa delle Summe	℥ 6691	℞ 13	6	8		℥ 6691	℞ 13	6	8
1	Summa delle Summe	℥ 5488	℞ 15	9	29		℥ 5488	℞ 15	9	29
2	Summa delle Summe	℥ 2194	℞ 16	8	29		℥ 2194	℞ 16	8	29
3	Summa delle Summe	℥ 9224	℞ 10	4	20		℥ 9224	℞ 10	4	20
Vluma Summa de tutte le Summe		℥ 23599	℞ 16	5	22		℥ 23599	℞ 16	5	22

図16

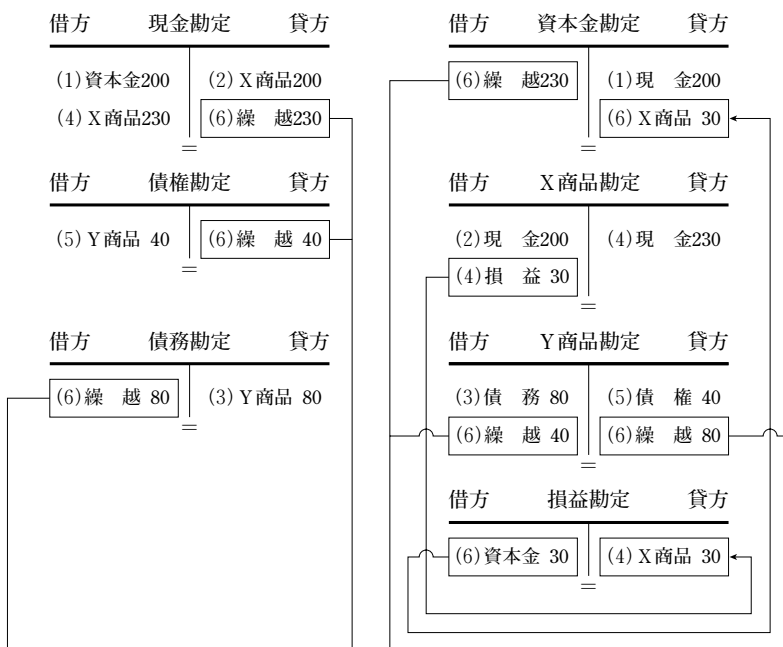
したがって、帳簿の更新時に、新しい帳簿に振替えられて、翌期に繰越された場合に、貸借平均原理が保証されるように、更新される帳簿から繰越、間違

いなく締切られたことを検証するだけでなく、帳簿の更新前、商品勘定が締切られた場合、さらに、帳簿の余白がなくなって、新しい勘定に振替えられた場合にも、貸借平均原理が保証されるように、締切られる帳簿から振替、間違いなく締切られたことを検証するのが「合計の総計表」と解釈されるかもしれない。最終的に、帳簿締切にも過誤のないことが検証されることになるからである。

そこで、帳簿締切については、あえて憶測するとして、簡単に例示するなら、帳簿の更新前に、締切前検証表としての「元帳の均衡表」、帳簿の更新後には、締切後検証表としての「合計の総計表」が作成されて、「元帳」は、以下のよう  
に振替、締切られるのではなかろうか。図17および図18を参照。

事例：前半

- (1) 現金200を元入れて、企業を開始。
- (2) X商品を仕入れて、現金200を支払う。
- (3) Y商品を仕入れて、支払い80は掛けとする。
- (4) X商品（原価200）を売上げて、現金230を受取る。
- (5) Y商品（原価30）を売上げて、受取り40は掛けとする。
- (6) 本日、帳簿を更新（口別損益を計算）。





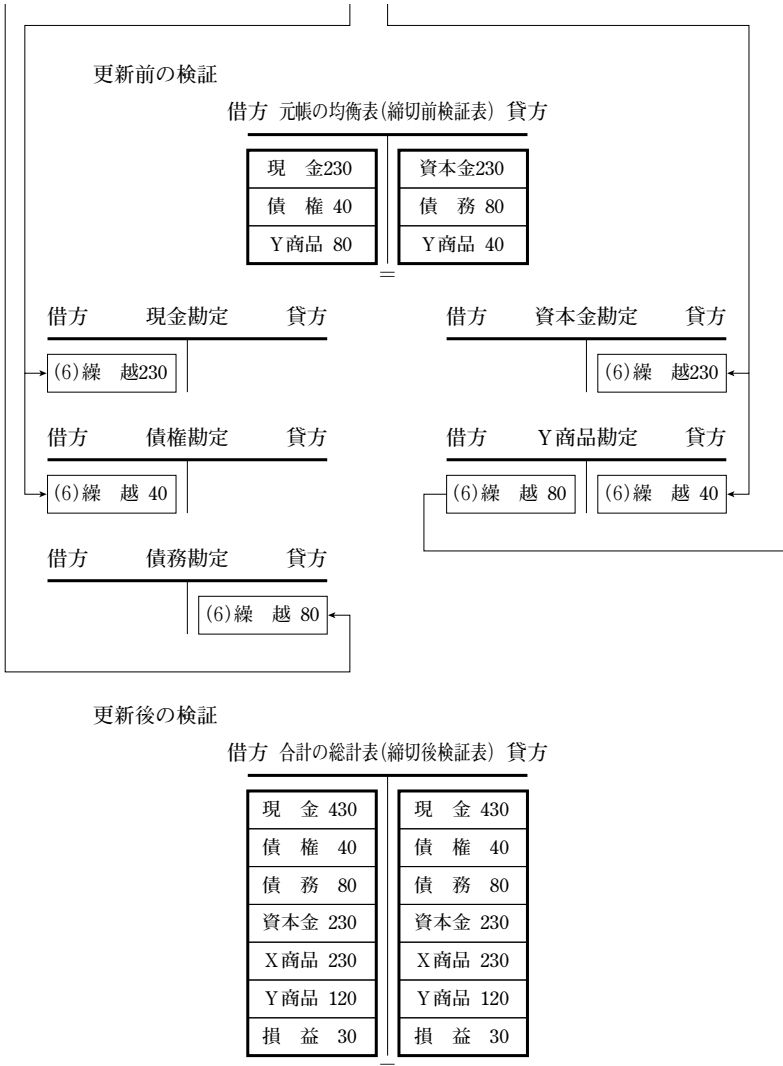
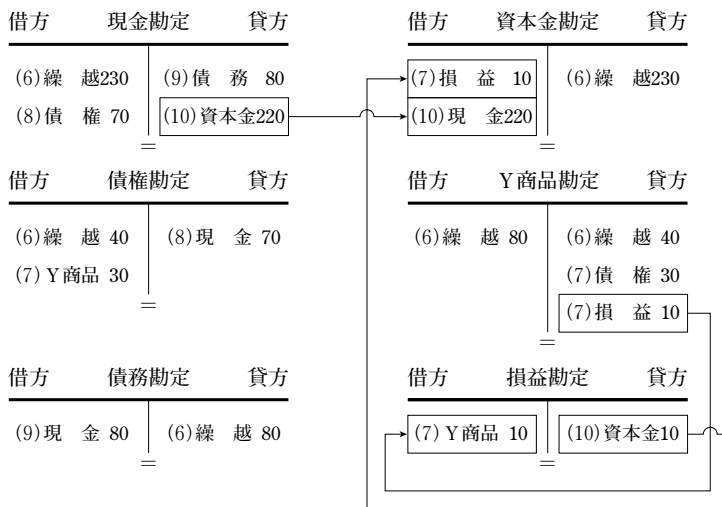


図17

事例：後半

- (7) Y商品（原価50）を売上げて、受取り30は掛けとする。
- (8) 債権の返済として、現金70を受取る。
- (9) 債務の返済として、現金80を支払う。
- (10) 本日、企業を解散（口別損益を計算）。



解散時の検証

借方 合計の総計表(締切後検証表) 貸方

現金 300	現金 300
債権 70	債権 70
債務 80	債務 80
資本金 230	資本金 230
Y商品 80	Y商品 80
損益 10	損益 10

図18

### 3. 抜粋書または計算書

ところで, Pacioloは, 「抜粋書」(documento, sape levare un conto), さらに, 「計算書」(scritta)を解説する。報告書についても解説するのである。

まずは, 抜粋書について, Pacioloは表現する。「債務者(借主)の請求があれば, 債務者(借主)に対する勘定をどのように抜粋するかを知らねばならない。この『抜粋書』は, 法律的に, 債務者(借主)が, 数年, 数カ月の長い間, この勘定を開設している場合には, 特に拒否されえない。この場合には, 債務者(借主)と取引を開始した時期まで遡るか, 決済があった場合には, これ以外の時点にまで遡って, 債務者(借主)の希望する時期から, その時々, 抜粋書が作成されることになる。すべて記録したものを網羅する両面の紙片に勘定を作成する。片面に収録しえない場合には, これについて記録したものを差引, 計算して, 残高は反対の片面, 借方の面または貸方の面に繰越される」<sup>49)</sup>のである。「最終的には, 一つの項目の借方の面または貸方の面の正味残高に要約される」<sup>49)</sup>と。

したがって, 債務者A, Bに区別する「債権勘定」から誘導される「報告書」である。請求があればのことであるが, 債務者(借主)に報告するために, このような抜粋書が作成されることに注目しておかねばならない。

さらに, 計算書について, Pacioloは表現する。「組合員(acomande)であるにしても, 代理人(commisioni)であるにしても, 他人のために営業に従事する場合には, 主人に対する勘定を同様にして抜粋するであろう。その時々, 相互の契約によって, 手数料については, 自己を債権者(貸主)にする。最後に, 正味残高については, 自己を彼の債務者(借主)にする。何か自己のものを出資した場合には, 自己を彼の債権者(貸主)にする。この場合に, これを検閲して, 主人は自己の帳簿と比較, 対照するであろう。異常がないことが判明すると, 好意を持ち, 信頼を寄せるであろう。したがって, 主人が提供

49) Pacioli, Luca; *op cit*, Cap. 30 (f. 207R). 二重括弧および括弧内は筆者。

Vgl., Penndorf, Balduin; *a. a. O.*, S. 138.

参照, 片岡義雄著; 前掲書, 226頁。

したか、送付したもの、自筆の書簡によって受取ったものすべてについて、異常のない報告をしなければならぬ。これとは反対に、主人であるなら、代理人ないし書記には、これと同様に報告させるであろう。しかし、代理人との間で間違いがないようにするためには、この『計算書』が提出されるに先立って、元帳、仕訳帳、日記帳に記録される項目、記録される箇所と比較、対照しておかれねばならない<sup>50)</sup>と。

したがって、組合員または代理人が開設する「資本金勘定」から誘導される「報告書」である。財産を管理することが委託される組合員または代理人が主人に報告するために、このような計算書が作成されることに注目しておかねばならない。

このように、1494年に Pacioloによって出版される印刷本『算術・幾何・比および比例全書』の第Ⅰ部、第9編の第11論説「計算と記録の詳説」を解明して、筆者なりの卑見を披瀝したところで、複式簿記としては、どこがイタリア簿記であるかについても解明される。

まずは、帳簿記録については、帳簿の見開きの両面、帳簿の見開きの左側ないし借方の面に記録されると同時に、右側ないし貸方の面に記録される。まさに左右対照に記録される。まずは、債権および債務を備忘するために、債権の証拠書類として、債務者A、Bに区別する債権、債務の証拠書類として、債権者C、Dに区別する債務が記録される「人名勘定」が開設されたのだが、さらに、日々の取引事象を「債務者（借主）」と「債権者（貸主）」に分解して、現金の出納はもちろん、商品の売買が記録される「物財勘定」も開設される。はては損失（費用）の発生と利益（収益）の発生が記録される「名目勘定」も開設される。人名勘定に記録するのと同様に、物財勘定でも名目勘定でも、「債務者（借主）」と「債権者（貸主）」に分解して、帳簿の見開きの両面の左右対照に記録されるのは、あくまで「反対記録」されるためではなかろうか。反対記録されることによって、帳簿の見開きの両面の左右対照に、日々の取引事象の金

50) Pacioli, Luca; *op cit*, Cap. 30 (f. 208L). 二重括弧および括弧内は筆者。

Vgl., Penndorf, Balduin; *a. a. O.*, S. 138/139.

参照, 片岡義雄著; 前掲書, 227頁。

額、同額が記録して転記されるので、常時、帳簿の見開きの左側ないし借方の面に記録される合計と右側ないし貸方の面に記録される合計が一致するという「貸借平均原理」が保証される。貸借平均原理が保証されることによって、企業の開始時、企業の開始後に保有する財産を管理しうるといふわけである。

したがって、帳簿記録については、日々の取引事象を「債務者（借主）」と「債権者（貸主）」に分解して、仕訳帳には、「借方」を意味する前置詞と「貸方」を意味する前置詞を冠することによって移記されて、元帳に転記されると、帳簿の見開きの左側の面は、接頭辞＋動詞または冠詞前置詞＋名詞を付して、「彼は支払うべし＝私に借りている」、したがって、「借主＝借方」の面、帳簿の見開きの右側の面は、これまた、接頭辞＋動詞または冠詞前置詞＋名詞を付して、「彼は持つべし＝私に貸している」、したがって、「貸主＝貸方」の面に記録されるので、「貸借平均原理」が保証されるように、間違いなく記録されようというものである。

さらに、帳簿締切については、まずは、(1) 商品が完売されて、X商品、Y商品に区別する商品勘定が締切られる場合、さらに、(2) 勘定の余白がなくなって、新しい勘定に振替えられる場合に、帳簿締切までに、実際に勘定が締切られる。商品勘定に計算される商品売買益または商品売買損、さらに、名目勘定に計算される損失（費用）残高および利益（収益）残高が損益勘定に振替えられる場合にも、損益勘定に計算される純損益が資本金勘定に振替えられる場合にも、仕訳帳に記録されることはない。仕訳帳から元帳に転記されることはない。損益勘定にも資本金勘定にも直接に振替えられるだけである。さらに、余白のなくなった勘定から振替えられる場合にも同様。新しい勘定に直接に振替えられるだけである。

これに対して、最後に、(3) 帳簿全体が更新されて、帳簿の更新時に、新しい帳簿に振替えられて、翌期に繰越される場合に、帳簿締切として、実際に帳簿が締切られる。しかし、これまた、仕訳帳に記録されることはない。仕訳帳から元帳に転記されることはない。更新される帳簿から新しい帳簿に直接に振替えられるだけである。いずれにしても、「実際の取引ではなく」、「無駄な徒勞であろうので、仕訳帳に記録される必要はない」といふわけである。

したがって、元帳の摘要欄の片隅、右端に、その相手勘定の丁数、「元丁」が記録されるので、帳簿の更新前には、「帳簿の突合」によって、「この項目に付される丁数を拠り所にするので、元帳は借方の面と貸方の面に、その反対項目が見出されるか」かどうか、元帳に記録される勘定から相手勘定が照合されねばなるまい。

もちろん、仕訳帳の左端の行に記録される、転記される元帳の丁数、「元丁」が記録されるので、帳簿の更新前には、「帳簿の突合」によって、「元帳の借方の面と貸方の面が仕訳帳のそれと完全に一致するのが見出される」かどうか、仕訳帳から元帳が照合されねばなるまい。帳簿締切に移行するには、帳簿記録に過誤のないことが検証しておかれねばならないからである。

さらに、帳簿締切に移行するのに、帳簿記録に過誤のないことを改めて検証するためには、「元帳の均衡表」が作成されねばならない。元帳に組込まれるのではなく、計算書に仮設されるだけの元帳の均衡表である。締切前検証表としては、随時に、「合計検証表」、今日の「合計試算表」が作成されるのかもしれない。貸借平均原理が保証されるように、間違いなく記録されていることを検証するのが合計検証表と解釈されるからである。しかし、帳簿の更新前には、「残高検証表」、今日の「残高試算表」が作成されねばならない。間違いなく記録されていることはもちろん、貸借平均原理が保証されるように、更新される帳簿から繰越、間違いなく締切られうることを検証するのが残高検証表と解釈されるからである。

これに対して、帳簿締切が完了すると、帳簿締切にも過誤がないことを検証しておくために、「合計の総計表」が作成されねばならない。これまた、元帳に組込まれるのではなく、計算書に仮設されるだけの合計の総計表である。更新して締切られる帳簿に、残高が計算される場合には、この残高が繰越されて締切られた帳簿の借方の面の合計の総計と貸方の面の合計の総計が計算されるのが合計の総計表ではなかろうか。貸借平均原理が保証されるように、更新される帳簿から繰越、間違いなく締切られたことを検証するのが合計の総計表と解釈されるからである。

したがって、帳簿締切については、締切前検証表としての「元帳の均衡表」

によって確認されるのは、更新される帳簿に計算される残高について、「借方合計＝貸方合計」、締切後検証表としての「合計の総計表」によって確認されるのは、更新された帳簿に計算される合計について、「借方総計＝貸方総計」である。帳簿の更新前に、「間違いなく記録されている」ことはもちろん、貸借平均原理が保証されるように、「間違いなく締切られうる」ことが検証されようというものである。帳簿の更新後には、貸借平均原理が保証されるように、「間違いなく締切られた」ことが検証されようというものである。このように仮設されるだけの計算書は、いずれも「検証機能」を果たすにちがいない。

しかし、元帳の均衡表として作成される「残高検証表」は、やがては、元帳に組込まれる。期間損益計算に移行するとすると、企業の決算時に、「残高勘定」(Bilanzkonto)が開設されるのである。事実、Jan Ympyn, Cristoffelsの表現する「元帳の均衡表」(Balance van Boech)<sup>51)</sup>、さらに、Schweicker, Wolfgangの表現する「元帳の締切表」(Beschluß des Hauptpuchs)<sup>52)</sup>は、元帳に組込まれる残高勘定である。想像するに、企業の決算時に開設される残高勘定によっては、まずは、貸借平均原理が保証されるように、「間違いなく記録されている」ことが検証されるだけでなく、さらに、翌期には、貸借平均原理が保証されるように繰越されるので、「貸借平均原理」が保証されるように、「間違いなく締切られている」ことが検証されようというものである。まさに「締切時検証表」である。

そうであるとするなら、締切前検証表としての「元帳の均衡表」ばかりか、締切後検証表としての「合計の総計表」も、やがては、締切時検証表としての、「残高勘定」に吸収されてしまうのでは、と思考される。

51) Vgl., Jan Ympyn, Cristoffels; *Nieuwe Instructiv Ende bewijs der looffelijcker Consten des Reckenboecks* ···, Antwerpen 1543, Kap. 27.

Cf., Kats, P.; “Nouvelle Instruction” of Jehan Ympyn Chritophle, II, in: *The Accounting*, 27. Aug. 1927, p. 295.

参照, 泉谷勝美稿; 前掲誌, 170/177頁。

52) Vgl., Schweicker, Wolfgang; *Zwifach Buchhalten* ···, Nürnberg 1549, S. 5R.

なお、丁数が打たれてないので、筆者が便宜的に、表紙の裏側から打った丁数、4 Blattの左側の面Rechtと表現する。

参照, 拙稿; 「ドイツ簿記とイタリア簿記の交渉」, 『商学論集』(西南学院大学), 50巻3号, 2003年12月, 14頁, 51巻1号, 2004年7月, 6頁。

最後に、複式簿記としては、どこがイタリア簿記であるか、どのようにドイツに移入されたかを解明するために、16世紀前半に出版される印刷本における「帳簿記録」および「帳簿縮切」について整理することにする。

## 帳簿記録

仕訳帳	元帳	借方と貸方
1494年 Pacioloの印刷本		
<p>*開始時には、財産目録、開始後には、日記帳から移記。</p> <p>*二重記録</p> <p>*摘要欄の左端の行には、丁数(元丁)を記録。</p> <p>*摘要欄の前半には、「借方」を意味する前置詞(Per)を冠して、債務者(借主)を記録。後半には、縦複線、実際にはコロンのよって区分、貸方を意味する前置詞(A)を冠して、債権者(貸主)を記録。</p> <p>*記録は1493年11月8日から。更新日は不明。</p>	<p>*二重記録</p> <p>*元帳の借方の面には、債務者(借主)として、 債権の発生、 債務の消滅、 反対記録として、 現金の収入、 商品の仕入、 損失(費用)の発生を転記。</p> <p>貸方の面には、債権者(貸主)として、 債務の発生、 債権の消滅、 反対記録として、 現金の支出、 商品の売上、 利益(収益)の発生を転記。</p> <p>「相手」を意味する前置詞(per)を冠して、相手勘定を記録。</p> <p>*摘要欄の右隅には、相手勘定の丁数(元丁)を記録。</p>	<p>*帳簿の見開きの左側の面は、 接頭辞+動詞(die dare)または冠詞前置詞+名詞(del debito)を付して、「借方」(彼は支払うべし=私に借りている)と表現。</p> <p>*帳簿の見開きの右側の面は、 接頭辞+動詞(die havere)または冠詞前置詞+名詞(del credito)を付して、「貸方」(彼は持つべし=私に貸している)と表現。</p>
1549年 Schweickerの印刷本		
<p>*Pacioloの印刷本と、ほぼ同様。しかし、日記帳は例示されない。</p> <p>*摘要欄の左端の行には、取引番号と丁数(元丁)を記録。</p> <p>*摘要欄の前半には、「借方」を意味する前置詞(Für)を冠して、債務者(借主)を記録。後半には、縦複線によって区分、貸方を意味する前置詞(An)を</p>	<p>*Pacioloの印刷本と、ほぼ同様。</p> <p>「貸方」を意味する前置詞(An)または「借方」を意味する前置詞(Für)を冠して、相手勘定を記録。</p> <p>*摘要欄の左端の行には、仕訳帳に記録する取引番号を記録。</p> <p>*摘要欄の右隅には、相手勘定の丁数(元丁)を記録。</p>	<p>*Pacioloの印刷本と、ほぼ同様。</p> <p>*帳簿の見開きの左側の面は、 助動詞(soll)を付して、「借方」(彼は支払うべし=私に借りている)と表現。</p> <p>*帳簿の見開きの右側の面は、 助動詞+動詞(soll haben)を付して、「貸方」(彼は持つべし=私に貸している)と表現。</p>



<p>冠して、債権者（貸主）を記録。                  *債務者（借主）と債権者（貸主）に擬制するために、現金は「現金出納係」、商品は「商品売買係」に擬人化。                  *記録は1548年3月1日から5月4日。決算日は1548年5月5日。</p>		
---	--	--

帳簿締切

期間損益の計算	簿記の検証	残高の繰越
1494年 Pacioloの印刷本		
<p>*期末棚卸は導入されないで、商品勘定に計算されるのは口別損益。                  *資本金勘定は、利益を生み出す「元本」として開設。したがって、損益勘定は独立して開設。                  *商品勘定に計算される口別損益、これ以外の損失（費用）と利益（収益）を集合する「損益勘定」を開設して、更新時までの純損益を計算。更新時には、純損益は「資本金勘定」に振替。したがって、厳密ではないにしても、「口別損益計算」。</p>	<p>*文章でのみ表現。                  更新前に、帳簿の突合、締切前検証表として、「元帳の均衡表」を仮設。現金勘定、債権勘定および商品勘定、さらに、債務勘定、資本金勘定に計算される残高の借方合計と貸方合計が一致することを確認することによって、貸借平均原理が保証されるように、間違いなく締切られることを検証。                  *更新後に、締切後検証表として、「合計の総計表」を仮設。残高が繰越されて締切られた現金勘定、債権勘定および商品勘定、さらに、債務勘定、資本金勘定に計算される借方合計の総計と貸方合計の総計が一致することを確認することによって、貸借平均原理が保証されるように、間違いなく締切られたことを検証。</p>	<p>*現金残高、債権残高および商品残高、さらに、債務残高、資本金残高は、新たな現金勘定、債権勘定および商品勘定、さらに、債務勘定、資本金勘定に直接に振替えられて繰越。</p>
1549年 Schweickerの印刷本		
<p>*資本金勘定は、利益を生み出す「元本」として開設。したがって、損益勘定は独立して開設。                  *期末棚卸を導入。                  *商品勘定に計算される期間の口別損益、これ以外の損失（費</p>	<p>*残高勘定を開設。                  現金勘定、債権勘定および商品勘定、さらに、債務勘定、資本金勘定に計算される残高を「残高勘定」に振替。借方合計と貸方合計が一致することを確認す</p>	<p>*現金残高、債権残高および商品残高、さらに、債務残高、資本金残高は、残高勘定に振替られるので、「残高勘定」から、新たな現金勘定、債権勘定および商品勘定、さらに、債務勘定、</p>

用)と利益(収益)を集合する「損益勘定」を開設して、期間損益を計算。決算時には、期間損益は「資本金勘定」に振替したがって、「期間損益計算」。	ることによって、貸借平均原理が保証されるように、間違いなく記録されていることを検証するだけではなく、間違いなく締切られていることを検証。	資本金勘定に振替えられて繰越。
--	--	-----------------

\* 「締切前検証表」および「締切後検証表」, 「残高勘定」という表現は見出されないが、便宜的に、そのように表現する。